國學院大學学術情報リポジトリ

曹植の所謂「辞賦小道」をめぐって

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-03-25 キーワード (Ja): 揚雄, 詩人の賦と辞人の賦, 班固, 曹植, 辞賦小道 キーワード (En): 作成者: 鈴木, -崇義 メールアドレス: 所属:
URL	https://k-rain.repo.nii.ac.jp/records/2000210

曹植の所謂「辞賦小道」をめぐって

鈴木崇義

はじめに

本論は、曹植の「辞賦小道」という発言を軸として、主に漢から魏にかけての文人が、辞賦という文体をどのようにとらえていたかを考察するものである。賦という文体が確立したと見られる漢代以降、つまり、賦という文体が意識され始めた頃から、常に賦に対する意見は出されていた。例えば、揚雄がいう「詩人の賦」、「辞人の賦」[1]というものや、班固がいう「賦は古詩の流なり」[2]が挙げられるだろう。これらを見れば、賦は、どうあるべきか、どのようなものが良い作品なのか、ということが絶えず議論されてきたといえるだろう。

その後、後漢末から魏にかけて生きた曹植も、「辞賦は小道」[3]と、賦を軽んじるような発言をしている。これについて魯迅は、「曹丕は、文章によって名声を千載に残すことができる、と申しましたが、子建（曹植）は反対に、文章は小道で、論ずるに足りない、と言いました。しかし私の考えでは、この子建の論は、たぶん本心ではないと思います。」[4]と述べ、曹植は文学的な才能を有していても政治的な面で活躍できなかったから、文章は役に立たないと言ったのだ、と指摘している。前漢末の揚雄も、賦を得意としながらも賦は役に立たないと述べている。彼らはなぜこのように賦を否定するのだろうか。

本論は、曹植のこの発言を手がかりに、漢魏における賦に関する議論を俯瞰し、当時の文人達が辞賦をどのようなものと考えていたかを明らかにしようと試みるものである。

一，前漢における議論―枚皐・揚雄・劉向、劉歆―

まず、漢代の辞賦に関する議論の中で古い例として『漢書』の枚皐伝を見てみよう。枚皐は枚乗の子で武帝に仕えた。『漢書』の本伝によれば多くの辞賦作品を残したとされるが、現在はその内容を見ることができない。(5)

武帝春秋二十九乃得皇子、羣臣喜。故皐與東方朔作皇太子生賦及立皇子禖祝。受詔所爲、皆不從故事、重皇子也。初衞皇后立、皐奏賦以戒終。皐爲賦善於朔也。從行至甘泉・雍・河東、東巡狩、封泰山、塞決河宣房、游觀三輔離宮館、臨山澤、弋獵射馭狗馬蹴鞠刻鏤、上有所感、輒使賦之。爲文疾、受詔輒成。故所賦者多。司馬相如善爲文而遲、故所作少而善於皐。皐賦辭中自言爲賦不如相如、又言爲賦乃非。見視如倡、自悔類倡也。故其賦有詆**娸**東方朔、又自詆**娸**。其文**骫骳**、曲隨其事、皆得其意、頗詼笑、不甚閒靡。凡可讀者百二十篇、其尤嫚戲不可讀者尚數十篇。

武帝の春秋二十九にして乃ち皇子を得、羣臣喜ぶ。故に皐 東方朔と皇太子生賦及び立皇子禖祝を作る。詔を受けて爲る所なれば、皆 故事に從はず、皇子を重んずるなり。初め衞皇后立ち、皐 賦を奏して以て終を戒む。皐の賦を爲ること朔より善なり。從行して甘泉・雍・河東に至り、東のかた巡狩して、泰山に封じ、決河宣房を塞ぎ、三輔の離宮館を游觀し、山澤に臨み、弋獵・射・馭狗馬・蹴鞠・刻鏤、上感ずる所有り、輒ち之を賦せしむ。文を爲ること疾く、詔を受けて輒ち成る。故に賦する所の者多し。司馬相如は善く文を爲るも遲し。故に作る所は少けれども皐より善し。皐の賦は辭中自ら賦を爲るも相如に如かずと言ひ、又賦を爲るは乃ち非なりと言ふ。見視すること倡の如く、自ら倡に類するを悔ゆるなり。故に其の賦に東方朔を詆**娸**する有り、又自ら詆**娸**す。其の文は**骫骳**にして、其の事を曲隨し、皆 其の意を得、頗る詼笑し、甚しくは閒靡せず。凡そ讀むべき者は百二十篇、其の尤も嫚戲にして讀むべからざる者は尚ほ數十篇なり。(6)

枚皐は辞賦を非常に速く作ることができ、皇太子が誕生した際にそれを祝う辞賦を作り、その後も武帝の行幸に侍り事々に賦を作って奏上した。続けて、辞賦を作る様子に話は及び、枚皐は武帝の側近くに仕えて、求めに応じてす

ぐさま賦を作っていたことを伝えている。おそらく即興で賦を作っていたのだろう。他方、司馬相如は賦を作ることが遅く作品数も少なかった。しかし、じっくりと時間をかけて作られたためか、その作品の内容は枚皐より優れていたという。この評価の違いは賦を作るスピードの違いによる。作品を完成させるまでの時間が長ければ、多様な典故を用いたり、様々に修辞を練ることもできるであろう。しかし、即興で作り上げ、かつ、修辞を錬磨し全体の整理まで行き届いた作品として完成させるのは、おそらく難しい。極論すれば、枚皐の賦はその場限りの娯楽の域を出ず、後世まで読み継がれるような完成度の高い作品として仕上げられていなかったのである。一方の司馬相如は、辞賦の作成に十分時間をかけ、後世に残る作品を生み出すことができたのだといえるだろう。

もっとも、枚皐もこの点については自覚していたようである。自分の作品が一時の娯楽として消化されるだけで、司馬相如のそれより内容が劣るということや、自分自身が娯楽を提供する俳倡のような人間としてしか評価されなかったことを後悔している。

続けて、揚雄の言説を見てみよう。揚雄は『論語』に擬して『法言』という書物を著し、その中の「吾子篇」に辞賦に関しての考えを述べている。以下、その考えを逐条みてゆくとしよう。

一、或問、吾子少而好賦。曰、然。童子雕蟲篆刻。俄而曰、壯夫不爲也。或曰、賦可以諷乎。曰、諷乎。諷則已、不已、吾恐不免於勸也。

一、或ひと問ふ、吾子少くして賦を好むかと。曰はく、然り。童子の雕蟲篆刻なるのみと。俄かにして曰はく、壯夫は爲さざるなりと。或ひと曰はく、賦は以て諷すべきかと。曰はく、諷せんか。諷すれば已み、已まずんば、吾れ勸むるを免れざるを恐るるなり。

揚雄は若い時に辞賦を好んで作っていた。しかしそれは、「童子の雕蟲篆刻」、すなわち子供の手遊びのようなもので、言葉を美しく飾り立てることに注力してこしらえただけに過ぎないものだったという。続けて、辞賦には風諭の機能を持たせる必要があり、これがなければ天子に奢侈を勧めるのみで、政治に資するものとはなり得ないという考えを述べている。ここから、揚雄が政治や社会に役に立つか否かという視点で辞賦の価値を判断していたということがわかる。

二、或問、景差・唐勒・宋玉・枚乘之賦也、益乎。曰、必也淫。淫則奈何。曰、詩人之賦麗以則、辭人之賦麗以淫。如孔氏之門用賦也、則賈誼升堂、相如入室矣。如其不用何。

二、或ひと問ふ、景差・唐勒・宋玉・枚乘の賦は、益あるかと。曰はく、必ずや淫なり。淫なれば則ち奈何と。曰はく、詩人の賦は麗にして以て則に、辭人の賦は麗にして以て淫なり。孔氏の門の賦を用ゐるや、則ち賈誼は堂に升り、相如は室に入る。其の用ゐざるを如何せんと。

それでは、揚雄が良いとみなす辞賦作品はどのようなものなのだろうか。それを端的に示しているのが右に挙げた第二章である。景差・唐勒・宋玉・枚乘と名前を連ね、彼らの作品は等しく「淫」、すなわち道に外れた内容であると述べている。続けて、辞賦を「詩人の賦」と「辞人の賦」という二つの枠組みを設けて区別している。「詩人の賦」は言うまでもなく『詩経』詩人の精神を受け継ぎ風諭の意を込めた、政治・社会に対して何らかの寄与をするものである。一方、「辞人の賦」とは枚皐が悔やんだような、俳倡が行う技芸のような一時の娯楽を提供する存在に過ぎないと考えられるものであろう。

以上の点から、揚雄は辞賦に二つの要素を見出していたと考えられる。一つには『詩経』以来の伝統を受け継ぐ、政治・社会に資することを目的としたもの。もう一つは、滑稽や俳倡のように、天子を喜ばせることを目的としたもの。いずれをとっても、天子に奉仕・献上する性質を持っているとみなせようが、揚雄が前者の「詩人の賦」を目指していたことは言うまでもない。

以上の価値判断をした上で、揚雄は景差・唐勒・宋玉・枚乘を「辞人の賦」をなす文人であるとし、賈誼や司馬相如を『詩経』の精神を受け継いだ「詩人の賦」をなす文人であると、それぞれ評価している。

七、或問、君子尚辭乎。曰、君子事之爲尚。事勝辭則伉、辭勝事則賦、事・辭稱則經。足言足容、德之藻矣。

七、或ひと問ふ、君子は辭を尚ぶかと。曰はく、君子事を之れ尚しと爲す。事辭に勝れば則ち伉、辭事に勝れば則ち賦、事と辭と稱(かな)へば則ち經。言ふに足り容(もち)ふるに足るは、德の藻なり。

「君子は辞を尚ぶか」との問いに対して、「君子は事を之

れ尚」ぶと答えている。「辞」は言葉、「事」は事実や行動、あるいは実践と読み替えることができよう。揚雄は言葉よりも事実や行動を重視すると主張する。辞賦によって政治・社会に寄与することを目指していたからである。辞賦は内容のあるもの――「詩人の賦」――と、無いもの――「辞人の賦」――に区別され、実践にすぐれ言葉も美しいものは経書に比すほどの価値を有するが、修辞にのみ主眼を置いたものは子供の遊び事のような、取るに足らないものであるとみなしている。

もう少し揚雄の辞賦観をのぞいてみよう。『漢書』揚雄伝には、揚雄が辞賦を作る際の心構えについて述べた記述がある。

雄少而好學、不爲章句。訓詁通而已、博覽無所不見。爲人簡易佚蕩、口吃不能劇談、默而好深湛之思、清靜亡爲、少耆欲、不汲汲於富貴、不戚戚於貧賤、不修廉隅以徼名當世。家産不過十金、乏無儋石之儲、晏如也。自有大度、非聖哲之書不好也。非其意、雖富貴不事也。顧嘗好辭賦。先是時、蜀有司馬相如、作賦甚弘麗温雅。雄心壯之、每作賦、常擬之以爲式。

雄少くして學を好み、章句を爲さず。訓詁通ずるのみにして、博覽して見ざる所無し。人と爲り簡易佚蕩、口吃にして劇談する能はず、默して深湛の思を好み、清靜にして爲す亡し、少くして耆欲、富貴に汲汲せず、貧賤に戚戚せず、廉隅を修めずして以て名を當世に徼(もと)む。家産十金に過ぎず、乏として儋石の儲(たくわえ)無きも、晏如たり。自ら大度有り、聖哲の書に非ざれば好まざるなり。其の意に非ざれば、富貴と雖も事へざるなり。顧みて嘗て辭賦を好む。是の時に先んじて、蜀に司馬相如有り、賦を作れば甚だ弘麗温雅。雄心に之を壯とし、賦を作る毎に、常に之に擬して以て式と爲す。(7)

ここには、若い頃から学問に励み貧賤富貴にとらわれない揚雄の姿が描き出されている。その上で、揚雄は自身の半生を振り返って、若い頃は辞賦を好んで作っていたが、その時は司馬相如の作品を模擬して作っていたことを回想している。(8) この点は、先に挙げた『法言』でも司馬相如を辞賦作家として非常に高く評価していることと結合する。

これは、辞賦という文体が形成される初期の段階で、ある人物、あるいは作品が一種のモデルとなって典型化した一例と考えられる。すなわち、司馬相如の作品が辞賦の典型と見なされた結果、後発の作品が模擬性を強く持つよう

になったということである。[9]

この他、『漢書』の「司馬相如伝贊」にも「相如雖多虚辭濫説、然要其歸引之於節儉。此亦詩之風諫何異。揚雄以爲靡麗之賦、勸百而風一。猶騁鄭衞之聲、曲終而奏雅。不已戲乎。（相如は虚辭濫説多しと雖も、然れども其の之を節儉に歸引するを要む。此れも亦た詩の風諫と何ぞ異ならん。揚雄は以て靡麗の賦は、百を勸めて一を風すと爲す。猶ほ鄭衞の聲を騁し、曲終はりて雅を奏するがごとし。已に戲れずや。）」と、司馬相如の辞賦は虚辞濫説が多いが、最後に節制や倹約を求める言辞を用いて結んでいることから、これは『詩經』を継承する作品とみなすことはできる。しかし、その「百を勸めて一を風す」という、多くの贅沢・奢侈なものを天子に進めて、最後に申し訳程度に風諭をする姿勢については疑問を抱くようになる。そして、その作品は淫靡な作品が集められているとして謗られる「鄭風」や「衞風」に等しい。だから私揚雄は、賦をつくることをやめるのだと宣言する。このように当初は司馬相如を手本としていた揚雄も、やがて司馬相如に対して厳しいまなざしを向けるようになる。[10]

ここまでの議論を見れば、揚雄は賈誼、司馬相如については『詩経』詩人を継承する文人と見なし、とりわけ司馬相如を高く評価していた。一方、枚乗、東方朔などの文人については「辞人」に過ぎない、俳優・俳倡の徒に等しいとの評価を下している。そうして、揚雄は司馬相如の作に擬した賦を作るも、やがてそれは「百を勸めて一を諷す」るものに過ぎないとし、司馬相如を批判した上で揚雄自身は辞賦を作ることをやめてしまう。

以上のように、前漢の文人たちは辞賦を作ることによって『詩経』精神の継承を試みたが、結局は言辞をまねるだけで、『詩経』精神を継承することはできないというジレンマに陥ってしまった。前漢は、辞賦誕生の時代であるにもかかわらず、早くもその存在意義をその作者たちによって疑問視されていたのである。[11]

これら前漢における賦の議論の集大成ともいうべき記述が、『漢書』「藝文志」詩賦略に残されている。この『漢書』「藝文志」は、劉向・劉歆父子の手になる『七略』をその基盤として成立している。しかし、『漢書』「藝文志」中の記述のどの部分が『七略』であり、どの部分が班固の手によるのかということについては未だ決着を見ていないようだが、本論は「詩賦略」については劉向・劉歆の『七略』の記述をほぼ継承しているという立場をとることとする。[12]

傳曰、不歌而誦謂之賦。登高能賦可以爲大夫。言感物造耑、材知深美、可與圖事、故可以爲列大夫也。古者諸侯卿大夫交接鄰國、以微言相感、當揖讓之時、必稱詩以諭其志、蓋以別賢不肖而觀盛衰焉。故孔子曰、不學詩、無以言也。春秋之後、周道𥨊壞、聘問歌詠不行於列國、學詩之士逸在布衣、而賢人失志之賦作矣。大儒孫卿及楚臣屈原離讒憂國、皆作賦以風。咸有惻隱古詩之義。其後宋玉、唐勒、漢興枚乘、司馬相如、下及揚子雲、競爲侈麗閎衍之詞、没其風諭之義。是以揚子悔之、曰詩人之賦麗以則、辭人之賦麗以淫。如孔氏之門人用賦也、則賈誼登堂、相如入室矣。如其不用何。傳に曰はく、歌はずして誦するを之を賦と謂ふ。高きに登りて能く賦せば以て大夫爲るべし。言ふこころは物に感じて耑に造り、材知深美なれば、與に圖事すべく、故に以て大夫に列すと爲すべし。古者 諸侯卿大夫 鄰國と交接するに、微言を以て相感じ、揖讓の時に當り、必ず詩を稱して以て其の志を諭じ、蓋し以て賢不肖を別ちて盛衰を觀る。故に孔子曰はく、詩を學ばざれば、以て言ふこと無しと。春秋の後、周道𥨊く壞れ、聘問するに歌詠 列國に行はれず、詩を學ぶの士 逸れて布衣に在り、而して賢人失志の賦作れり。大儒孫卿及び楚臣屈原讒に離ひ國を憂へ、皆 賦を作りて以て風す。咸 惻隱古詩の義有り。其の後の宋玉、唐勒、漢興りて枚乘、司馬相如、下は揚子雲に及ぶまで、競ひて侈麗閎衍の詞を爲り、其の風諭の義を没す。是を以て揚子 之を悔い、詩人の賦は麗にして以て則に、辭人の賦は麗にして以て淫なりと曰ふ。如し孔氏の門人 賦を用ゐるや、則ち賈誼は堂に登り、相如は室に入る。其の用ゐざるを如何せん。(13)

まず、賦という者は、歌うものではなく誦する（朗読する）ものであるという宣言。これに続けて「登高遠望」の発想に結びつけ、高い所に登って賦を作ることができるなら、大夫（立派な人物）とみなすことができるとしている。このように賦が作れることが立派な人物である証であることを示した上で、春秋時代には国家間の外交には大夫たちによる詩の応酬がなされていたことを挙げている。最初に「賦」といい次に「詩」というのは、賦は『詩経』を継承するものであるという認識によるものであろう。ところが時代が下り、次第に国家間の外交に詩が用いられなくなると、詩人達は自分達の居場所を求めて野に下った。そこで、自身の不遇を嘆く「賢人失志の賦」が誕生したというので

ある。

「賢人失志の賦」の先蹤は、屈原の「離騒」である。屈原は国を憂えて君主をいさめる気持ちがあったために『詩経』の精神を受け継いだが、讒言に遇いそれを発揮する機会を奪われてしまった。そこで、我が身の不遇と楚の国の行く末を憂えて「離騒」を作った。ところが、屈原の弟子とみなされる宋玉や唐勒はその屈原の言辞をまねただけで、所謂「病無くして呻吟する」ものに過ぎない。時代を下って前漢の司馬相如や揚雄らも、屈原をまねるだけ、あるいは言葉遣いや修辞技巧に力を注ぐのみで風諭の精神を見失ったとしている。

最後には、揚雄の賦に関する議論を引いて結んでいるが、これは、「詩人の賦」を理想としながらも「辞人の賦」を脱しきれない揚雄の葛藤を継承しているのである。

二、後漢における議論―班固・王符・張衡あるいは蔡邕―

それでは、後漢に入ると辞賦はどのようにとらえられ、考えられていったのであろうか。辞賦の作品数を前漢と後漢で分けて数えてみると後漢の方が多い。もちろん、後世になればより多くの文献が残るということは考慮すべきであろうが、それにしても作品数は後漢に入るとずっと多くなる。(11)前漢末にその存在を疑問視された辞賦は、後漢に至ってなお作り続けられていたのである。同時に、辞賦に対する意見も呈されるようになっていった。

或曰、賦者、古詩之流也。昔成康没而頌聲寢、王澤竭而詩不作。大漢初定、日不暇給。至於武宣之世、乃崇禮官、考文章、内設金馬石渠之署、外興樂府協律之事、以興廢繼絶、潤色鴻業。（略）故言語侍從之臣、若司馬相如、虞丘壽王、東方朔、枚皐、王褒、劉向之屬、朝夕論思、日月獻納。而公卿大臣、御史大夫倪寛、太常孔臧、太中大夫董仲舒、宗正劉德、太子太傅蕭望之等、時時間作。或以抒下情而通諷諭、或以宣上德而盡忠孝、雍容揄揚、著於後嗣、抑亦雅頌之亞也。故孝成之世、論而録之。蓋奏御者、千有餘篇、而後大漢之文章、炳焉與三代同風。

或ひと曰はく、賦は、古詩の流なり。昔成康没して頌聲寢(や)み、王澤竭きて詩作らず。大漢初めて定まるや、日給するに暇あらず。武宣の世に至りて、乃ち禮官を崇び、文章を考へ、内には金馬石渠の署を設け、外

には樂府協律の事を興し、以て廢れるを興し絶えたるを繼ぎ、鴻業を潤色す。（略）故に言語侍從の臣、司馬相如、虞丘壽王、東方朔、枚皐、王褒、劉向の屬の若きは、朝夕に論思し、日月に獻納す。而して公卿大臣、御史大夫倪寛、太常孔臧、太中大夫董仲舒、宗正劉德、太子太傅蕭望之等、時時間ま作る。或いは以て下情を抒べて諷諭を通じ、或いは以て上德を宣べて忠孝を盡くし、雍容 揄揚して、後嗣に著せり、抑も亦た雅頌の亞なり。故に孝成の世、論じて之を録す。蓋し奏御せる者、千有餘篇、而る後に大漢の文章、炳焉として三代と風を同じうせり。[15]

まずは、班固の「両都賦」の序文をみてみよう。最初に、辞賦は『詩経』を受け継いだものだと宣言している。続けて、「言語侍從の臣」である司馬相如たちが休むことなく賦を作り続け、天子に献上したことから、現在も賦によって国家を賞揚することができたのだと、国家運営上の辞賦の重要性を主張する。[16] ここには揚雄が煩悶した辞賦の社会的意義に関する疑問は見られない。揚雄が厳しく批判した前漢の文人たちが等しく高い評価を受け、前漢の栄光を辞賦により飾ったことが示されている。揚雄は司馬相如ら辞賦作家を批判したが、班固は司馬相如たちが活躍できた太平の時代を賞賛している。治世を褒め、奢侈すら勧めるような内容の辞賦を作ることができた、そんな前漢の時代に対する懐古と憧憬がこの序文には現れている。班固は、辞賦はどのようにあるべきかということよりも、壮大な内容の辞賦が作れる環境に焦点を当てることにより、辞賦の王朝賛美の面を評価しているのである。

続けて、当時辞賦が担っていた役割に関する王符の意見を見てみよう。

夫教訓者、所以遂道術而崇德義也。今學問之士、好語虛無之事、爭著彫麗之文、以求見異於世、品人鮮識、從而高之。此傷道德之實、而或矇夫之大者也。詩賦者、所以頌善醜之德、洩哀樂之情也。故温雅以廣文、興**喻**以盡意。今賦頌之徒、苟爲饒辯屈蹇之辭、競陳誣罔無然之事、以索見怪於世。愚夫戇士、從而奇之、此悖孩童之思、而長不誠之言者也。

夫れ教訓とは、道術を遂げて德義を崇むる所以なり。今 學問の士、虛無の事を語るを好み、彫麗の文を著はすを爭ひ、以て世に異とせられんことを求め、品人鮮識、從りて之を高む。此れ道德の實を傷なふは、或

矇の夫の大なる者なり。詩賦は、善醜の德を頌め、哀樂の情を洩ばす所以なり。故に温雅にして以て文を廣め、興喩して以て意を盡くす。今の賦頌の徒、苟くも饒辯屈蹇の辭を爲し、競ひて誣罔無然の事を陳べ、以て世に怪とせられんことを索む。愚夫戇士、從りて之を奇とす、此れ孩童の思ひに悖りて、不誠の言に長ずる者なり。(17)

王符はその著『潛夫論』にて、詩賦は物事の善悪を判断して善いものは褒め、悲しみや楽しさといった感情を述べることが役割であるとしている。その上で、しかし当世の賦や頌を作るものたちは、言葉を尽くして虚構を連ねることを好み、奇をてらった言説を用いて世の中に認められようとしている。最近は、こういった不誠実な人間が増えたと嘆いている。

この時代は辞賦が出世のための道具になってしまい、人の注目を集めるためならば、内容はさておき虚辞乱説を書き連ねても良い、という考えが蔓延してしまったというのである。王符は、揚雄が行った辞賦がどのようにあるべきか、という議論から離れて、辞賦を出世の道具として用いる連中や、彼らをのさばらせる社会そのものに対して批判の目を向けるのである。ここには、「詩人の賦」、「辞人の賦」というような分類ももはやなされない。空虚な辞賦を作る人物と、その人物を生み出した社会への批判に満ちている。

この他に、王符と同時期を生きた張衡も、「論貢擧疏」(『通典』巻一六)という文章にて議論を展開していた。しかし、この文章に関しては、福山泰男氏によってこの張衡の「論貢挙疏」とほぼ同一の文章が、蔡邕の「宜所施行七事」(18)の「五事」として掲げられていることが考証されている。(19)本論は福山氏の考証を受け、蔡邕「宜所施行七事」の五事を挙げて検証することにしよう。

五事。臣聞古者取士、必使諸侯歲貢。孝武之世、郡舉孝廉、又有賢良、文學之選、於是名臣輩出、文武並興。漢之得人、數路而已。夫書畫辭賦、才之小者、匡國理政、未有其能。陛下即位之初、先涉經術、聽政餘日、觀省篇章、聊以游意、當代博弈、非以教化取士之本。而諸生競利、作者鼎沸。其高者頗引經訓風喩之言、下則連偶俗語、有類俳優。或竊成文、虚冒名氏。

五事。臣聞くならく古者の士を取るや、必ずや諸侯をして歲貢せしむ。孝武の世、郡より孝廉を舉げ、又賢良、文學の選有り、是に於いて名臣輩出し、文武並び

興る。漢の人を得たるや、數路のみ。夫れ書畫辭賦は、才の小なる者にして、國を匡し政を理むるに、未だ其の能あらず。陛下即位するの初め、先づ經術に涉り、政を聽くの餘日に、篇章を觀省し、聊か以て意を游ばしむ、當に博弈に代ふべきも、以て教化して士を取るの本に非ず。而れども諸生 利を競ひ、作者鼎沸す。其の高き者は頗る經訓風喩の言を引くも、下は則ち俗語を連偶し、俳優に類する有り。或は成文を竊み、虚しく名氏を冒す。[20]

この文章は、先に挙げた福山氏が指摘するように、孝廉という官吏登用制度の、いわば制度疲労を指摘し、さらに霊帝が設置した鴻都門学という人材登用制度を批判したものである。孝廉には「賢良文学の選」という学問の優れた人物を推挙する理念があり、それに基づいて優れた人材を朝廷に送ることができるはずであった。しかし、鴻都門学によって登用される「書画辞賦」に秀でた者は、政治的な能力が必ずしも高いわけではない。また、「当代の博弈」も官吏としてふさわしい人材とはいえない。しかるに、孝廉に挙げられるために大勢の候補者が辞賦を作るようになってしまった。彼らの中で能力のある者は風諭性を持った作品を書くが、程度の低い者は俗語などを多用し、俳優や滑稽の技芸に等しい娯楽的な要素の強い作品を書き、さらには剽窃なども公然と行うようになってしまった。

ここには、辞賦がもはや出世のための道具に成り下がってしまったことに対する嘆きが現れている。ここに批判されるような内容を持つ作品は現在では見ることができないが、『詩経』の精神を継ぐものこそ政治を担うにふさわしい人物であるという理念は、後漢中期以降には形骸化してしまったとみてよいだろう。

前漢にあっては、枚皐が即興の娯楽の域を出ない辞賦を作ってしまったことを後悔し、揚雄が「詩人の賦」と「辞人の賦」という枠組みを設け、「詩人の賦」を理想として先人の作品を規範としながらも、結局は「辞人の賦」の域を出ないという苦悩が見られた。後漢になると、班固が漢王朝の再興にあわせて辞賦の復権を目指したかのように、王朝讃美の視点から『詩経』に連なる辞賦の位置づけを再確認した。しかし、それが後漢の中期末期になると、辞賦を作ることの理念が形骸化し、官吏に推挙されるための道具に堕してしまったことが、王符や張衡もしくは蔡邕によって批判を受けた。辞賦は『詩経』の後継者であることを求められながらも、間もなく「俳優の徒」に堕してしま

う危険性をふたたび指摘されたのである。

この後、時代は後漢末の混乱から三国時代を経て魏晋へと移ってゆくが、魏の曹丕は辞賦だけではなく文学を指して、「文章は経国の大業にして、不朽の盛事なり。[21]」と、文学は国家運営に匹敵するものであると宣言するのである。一方、辞賦に関しては、漢代においてはいわゆる知識人のなすべき文学行為であったが、建安時代に入ると次第に五言詩が盛んに行われるようになった。辞賦は文学の最たるものとの意識は失われなかったであろうが、この時代には様々な文学のジャンルが発生し、またジャンルが意識され始めた。[22]これらのジャンルの発生に関しては、辞賦との関係を考えないわけにはいかないが、今はこの後の辞賦に関する議論を引き続き検討してゆきたい。

三、曹植と呉質および楊修との議論

曹植は、建安時代を代表する文人である。その作品は高く評価され、曹植自身も「余少而好賦、其所尚也。雅好慷慨、所著繁多。雖觸類而作、然蕪穢者衆。（余少くして賦を好み、其れ尚ぶ所なり。雅に慷慨を好み、著す所繁多なり。類に觸れて作ると雖も、然れども蕪穢なる者衆し。[23]）」と述懐するように、若い頃から特に辞賦を作ることを好んでいたようである。一方で「辞賦は小道なり」と、辞賦の価値を否定するかのような発言もしている。曹植に「辞賦は小道なり」と言わしめたのは何だったのか。この発言が見られる「与楊徳祖書」を中心に、曹植の辞賦に関する議論の内容を検討してゆこう。[24]

曹植は、この楊修に与えた「与楊徳祖書」以前に、呉質に対しても「与呉季重書」（『文選』巻四二）を執筆している。張可礼氏[25]および江竹虚氏[26]は、ともに作成時期を「与呉季重書」は建安一九（二一四）年、「与楊徳祖書」は建安二一（二一六）年と繫年している。建安一九年は曹植が臨菑侯に封ぜられた年であり、兄の曹丕とどちらが太子に立てられるかがわからない、非常に不安定な時期でもあった。また、呉質と楊修は曹植に返事を書いており、どちらも『文選』に収録されている。[27]

以上を踏まえて、まずは曹植と呉質との議論、次いで曹植と楊修との議論、と順を追って見てゆくことにしよう。

得所來訊、文采委曲、曄若春榮、瀏若清風、申詠反覆、曠若復面。其諸賢所著文章、想還所治、復申詠之也。可令憙事小吏、諷而誦之。夫文章之難、非獨今也。古

之君子、猶亦病諸。家有千里、驥而不珍焉。人懐盈尺、和氏無貴矣。夫君子而不知音樂、古之達論、謂之通而蔽。墨翟不好伎、何爲過朝歌而迴車乎。足下好伎、値墨翟迴車之縣、想足下助我張目也。

來訊する所を得たれば、文采委曲にして、曄として春榮の若く、瀏として清風の若し、申詠反覆すれば、曠として復た面するが若し。其の諸賢の著す所の文章、想ふに所治に還りて、復た之を申詠せん。事を憙む小吏をして、諷して之を誦せしむべし。夫れ文章の難きは、獨り今のみに非ざるなり。古の君子も、猶ほ亦た諸を病めり。家いへに千里有れば、驥も珍とせず。人びとに盈尺を懐けば、和氏も貴きこと無し。夫れ君子にして音樂を知らざるは、古の達論、之を通にして蔽ありと謂へり。墨翟は伎を好まず、何爲れぞ朝歌を過ぎて車を迴せる。足下 伎を好み、墨翟の車を迴すの縣に値へり、想ふに足下 我を助けて目を張らん。(28)

曹植は「与呉季重書」のなかで、呉質の文章の美しさを褒め、その文章を部下たちに朗誦させるよう勧めている。その上で、「夫れ文章の難きは、獨り今のみに非ざるなり。古の君子も、猶ほ亦た諸を病めり。」と、文章を作ることの難しさを述べ、同時に、呉質に対して立派な政治を行うよう励ましている。文章を褒め、同時に赴任先での政治にも励むよう述べているという点は、政治と文学の結びつきが意識されてのことであろう。

これに対する呉質の返事には、「還治諷采所著、觀省英瑋、實賦頌之宗、作者之師也。衆賢所述、亦各有志。(略)此邦之人、閑習辭賦、三事大夫、莫不諷誦、何但小吏之有乎。(治に還りて著す所を諷采し、英瑋を觀省するに、實に賦頌の宗、作者の師なり。衆賢の述ぶる所も、亦た各おの志有り。(略)此の邦の人、辭賦に閑習し、三事大夫も、諷誦せざるは莫し、何ぞ但だ小吏のみ之れ有らんや。)」(29)とあり、曹植の辞賦作品を賦頌の本流、すなわち曹植が『詩経』以来の文学の正道を進んでいると評価し、かつ、当世の文人たちの規範ともなるべきものだと褒めている。さらに、官僚・役人たち皆が曹植の賦を読んでいるのだから、曹植の文学は大いに政治や社会に資するという評価している。

以上の議論は、前漢以来の文学に関する議論を継承している。それは、文学は政治・社会に資するべきものでなければならない、という意識のもとに展開された議論である。曹植と呉質の議論には、枚皐の後悔や揚雄の苦悩も見られないが、彼らの理想とした文学の形を実践しているという

自負―手紙の応酬という儀礼的、形式的な内容を含んでいるであろうにせよ―が現れている。

続けて、曹植と楊修の議論を見てゆこう。「与楊徳祖書」の李善注に引く『典略』は、「典略曰、臨菑侯以才捷愛幸、秉意投脩、數與脩書、論諸才人優劣。（典略に曰はく、臨菑侯 才の捷なるを以て愛幸し、意を秉りて脩に投じ、數しば脩に書を與へ、諸才人の優劣を論ず。）」という。おそらく、楊修とはしばしば手紙を交わして文学に関する議論を展開していたのだろう。[30]

植白。數日不見、思子爲勞、想同之也。僕少小好爲文章、迄至于今、二十有五年矣。然今世作者、可略而言也。昔仲宣獨步於漢南、孔璋鷹揚於河朔、偉長擅名於青土、公幹振藻於海隅、德璉發跡於此魏、足下高視於上京、當此之時、人人自謂握靈蛇之珠、家家自謂抱荊山之玉。吾王於是設天網以該之、頓八紘以掩之、今悉集茲國矣。

植白す。數日見ざれば、子を思ひて勞を爲す、想ふに之に同じからん。僕少小より好んで文章を爲り、今に至るに迄んで、二十有五年なり。然らば今世の作者、略ぼ言ふべきなり。昔 仲宣は漢南に獨歩し、孔璋は河朔に鷹揚し、偉長は名を青土に擅にし、公幹は藻を海隅に振ひ、德璉は跡を此の魏に發し、足下は上京に高視す、此の時に當り、人人自ら謂へらく靈蛇の珠を握りと、家家自ら謂へらく荊山の玉を抱けりと。吾が王是に於て天網を設けて以て之を該ね、八紘に頓して以て之を掩ひ、今悉く茲の國に集まれり。

まず、曹植が若い頃から文章を作ることが好きであったこと、それを二五年も続けたことの懐古から書き起こしている。そして、王粲（仲宣）、陳琳（孔璋）、徐幹（偉長）、劉楨（公幹）、應瑒（德璉）など建安七子に数えられる文人を列挙し、それぞれに文学の非常な才能を持つ彼らが曹操の下に一堂に会したことに思いを馳せる。

然此數子、猶復不能飛軒絶跡、一舉千里。以孔璋之才、不閑於辭賦、而多自謂能與司馬長卿同風。譬畫虎不成、反爲狗也。前書嘲之、反作論盛、道僕讚其文。夫鍾期不失聽、于今稱之。吾亦不能妄嘆者、畏後世之嗤余也。

然れども此の數子、猶ほ復た飛軒して跡を絶ち、一舉にして千里なる能はざるなり。孔璋の才を以て、辭賦を閑はず、而も多として自ら謂へらく能く司馬長卿と

風を同じうすと。譬へば虎を畫きて成らず、反て狗と爲るなり。前に書もて之を嘲るに、反て論を作し道を盛んにす。僕 其の文を讃す。夫れ鍾期は聽を失はず、今に于いて之を稱す。吾れも亦た妄りに嘆する能はざる者は、後世の余を嗤はんことを畏るればなり。

しかし、と、例えば陳琳の才能をもってしても司馬相如の辞賦には及ばないと指摘する。そして、陳琳の作品はまるで虎を描いたつもりが、できあがったのは犬にしか見えないようなものだ。と、厳しい評価を下す。同時に、「前に書もて之を嘲るに、反て論を作し道を盛んにす。」と、陳琳の辞賦を嘲ったところ、陳琳から反論があったこともあわせて告白している。陳琳と曹植の議論は現在残っていないため具体的な内容は不明であるが、ここには二人が辞賦に関する議論をたたかわせたことが暗示されている。その後に続けて、不用意に他人の文章を批評して、後世の人に自身が浅薄な見識しか持ち得ない存在であると思われてしまうようなことはしたくない、と曹植は述べる。ここには、曹植の文学に対する審美眼を後世の人に疑われたくないという意識が現れている。さらに続けて、曹植は「世人の著述、病無き能はず。僕常に人の其の文を譏彈するを好む、善からざる者有れば、時に應じて改定す。」と、文章というものは必ず欠点が残る。それを指摘してくれることはとても嬉しいことであるとし、文学をその仲間とともに切磋琢磨して磨き上げることは非常に重要なことであるという考えや、よりすぐれた文学を作りたい、文学に沈潛したいという意志をも示している。曹植は文学の営みについて決して否定的ではない。

今往僕少小所著辭賦一通相與。夫街談巷説、必有可采、擊轅之歌、有應風雅、匹夫之思、未易輕棄也。辭賦小道、固未足以揄揚大義、彰示來世也。昔楊子雲、先朝執戟之臣耳、猶稱壯夫不爲也。吾雖德薄、位爲蕃侯。猶庶幾勠力上國、流惠下民、建永世之業、留金石之功、豈徒以翰墨爲勳績、辭賦爲君子哉。若吾志未果、吾道不行、則將采庶官之實録、辯時俗之得失、定仁義之衷、成一家之言。雖未能藏之於名山、將以傳之於同好。此要之皓首、豈今日之論乎。其言之不慙、恃惠子之知我也。明早相迎、書不盡懷。植白。

今往 僕が少小より著す所の辭賦一通 相與にす。夫れ街談巷説も、必ず采るべき有り、擊轅の歌も、風雅に應ずる有り、匹夫の思ひも、未だ輕んじて棄て易から

ざるなり。辭賦は小道なり、固より未だ以て大義を揄揚し、來世に彰示するに足らざるなり。昔 楊子雲は、先朝執戟の臣のみ、猶ほ壯夫は爲さざるなりと稱す。吾れ德薄しと雖も、位は蕃侯爲り。猶ほ庶幾はくは力を上國に勠せ、惠みを下民に流し、永世の業を建て、金石の功を留めんことを、豈に徒だに翰墨を以て勳績を爲し、辭賦もて君子と爲さんや。若し吾が志 未だ果たされず、吾が道 行はれずんば、則ち將に庶官の實録を采り、時俗の得失を辯じ、仁義の衷を定め、一家の言を成さんとす。未だ之を名山に藏する能はずと雖も、將に以て之を同好に傳へんとす。此れ之を皓首に要むるに、豈に今日の論ならんや。其の言の慙ぢざるは、惠子の我を知るを恃めばなり。明早相迎へん、書は懷ひを盡さず。植白す。（傍線は筆者による）

手紙の結びに、今まで自分が作って来た辞賦を楊修に送り、同時にこれが街談巷説のようなものであっても何か見るべきものがあるはずだ、と、文学に対する矜恃をのぞかせる。手紙という性質から謙遜の辞と捉えることもできようが、自分が刻苦して作り上げた辞賦を見て欲しいという願いも込めているのだろう。その一方で、自分が目指すべきは「力を上國に勠せ、惠みを下民に流」すことであり、それこそ君子の本懐なのだ。だから、辞賦が上手だとしても君子であるためにはそれを誇ることはできない、というのである。

曹植は、この発言の裏付けに揚雄の辞賦に対する見解を引いているが、揚雄が辞賦（文学）と政治の関係性に固執したのに対して、曹植は文学と政治を区別している。つまり、政治に比べれば辞賦は小道に過ぎないが、だからといって辞賦そのものを否定することはしない。むしろ、「街談巷説も、必ず采るべき有り」と、小なりとはいえ辞賦そのものにも、辞賦そのものならではの価値があるのだと主張しているのである。

この主張は、前漢後漢をおおう政治・社会的な価値観にもとづく辞賦観と大きく異なる。漢代以前は、辞賦は政治・社会に何らかの寄与する所がなければならないと考えられてきた。ゆえに、揚雄は司馬相如がそれに相当する作品を作ったと信じてそれを模擬した。しかし、やがて揚雄は司馬相如の作品が奢侈に流れ「百を勸めて一を諷す」ることを不満に感じ、辞賦は政治・社会に貢献すべきものであるとしつつも、辞賦ではそれが成し得ないと判断して辞賦を作ることをやめると宣言した。後漢になると、班固は辞賦

の王朝讃美の面を強調したが、王符たちが指摘したように、辞賦の理念は形骸化してしまう。曹植もやはり辞賦は「小道」であって、「力を上國に勠せ、恵みを下民に流」すような政治・社会に貢献・寄与できるものではないとしたが、辞賦を無力なものであるとはみなさなかったし、辞賦を作ることをやめもしなかった。むしろ、自身の本懐が遂げられないのであれば、「名山に藏する能はずと雖も、將に以て之を同好に伝へんとす」と、文学に専念して後世の同好の士に自分の作品を読んで欲しいと、文学の上で後世に名を残したいというささやかな願いを吐露している。

曹植は、自身の本懐は揚雄以来の辞賦観の延長線上にあるとしつつ、辞賦については前漢後漢以来の思潮から切り離し、辞賦そのものにも価値があると考えたのである。

さて、この手紙を受け取った楊修は「答臨淄侯牋」（『文選』巻四十）という返信を書いている。

今之賦頌、古詩之流、不更孔公、風雅無別耳。脩家子雲、老不曉事、強著一書、悔其少作。（略）若乃不忘經國之大美、流千載之英聲、銘功景鍾、書名竹帛、斯自雅量、素所畜也、豈與文章相妨害哉。

今の賦頌は、古詩の流なり、孔公を更ざるも、風雅と別無きのみ。脩の家の子雲、老いて事を曉らず、強ひて一書を著はし、其の少きときの作を悔ゆ。（略）乃ち經國の大美を忘れず、千載の英聲を流し、功を景鍾に銘し、名を竹帛に書するが若きは、斯れ自ら雅量の、素より畜ふる所なり、豈に文章と相妨害せんや。

楊修は、曹植の辞賦作品を古詩の流れをくむもの、『詩経』の伝統を継ぐものであるとし、あくまでも漢代以降の文学観に立つ姿勢を崩さない。さらに、曹植の文学営為を「経国の大美」として褒め、曹植自身が政治・社会に貢献するということと辞賦を作ることは矛盾しないと訴える。このように、楊修は曹植が見いだそうとした辞賦の社会・政治からの分離を否定する。その上で、曹植の作品は『詩経』を継承しているのだから、後世まで読み継がれる価値を持っているのだと曹植を慰める。両者の手紙の応酬には、曹植と楊修の辞賦観の相違を見ることができる。

四、おわりに

賦は、発生以来その存在について絶えず問われ続けてきた。それは、『詩經』の精神を継承するという使命を負わ

されるも、その辞賦のもつ性質によってその使命を果たし得ない、あるいは困難であるという矛盾をいかに打開するかということであった。また、皮肉にも辞賦に与えられた使命のために、後漢中期以降になると出世の道具に成り下がってしまう憂き目も見ることになった。このために文人達は苦悩し、また、辞賦を安易な出世の道具とみなす風潮に批判のまなざしを向けた。一方、辞賦に読まれるテーマも広がりを見せ、次第に辞賦に求められてきた風諭の精神と、実際に作られる作品の内容の乖離が大きくなっていった。曹植の「辞賦小道」という言葉は、従来議論されてきたこの矛盾を、辞賦を政治性や社会性から敢えて切り離してみることによって解消し、新たな辞賦観を提供したと考えられるのではないだろうか。

曹植の辞賦作品、さらに魏晋の辞賦作品を眺めてみると様々にテーマが広がってゆく様子が見える。特に、班固が指摘した「賢人失志の賦」については、既に一つのあり方として詠物賦の形を取ることによって展開してゆくことが指摘されている。[31] 後漢中期頃から見えはじめる辞賦の抒情化の流れを、曹植は「辞賦は小道」という形で宣言した。これにより曹植は、その本懐である政治・社会に貢献することと、辞賦を作ることの意義とを切り離したのである。後漢末、所謂「建安時代の文学」を一つの画期とすれば、この時代に辞賦はそのあり方を抒情化という道を進むことにより変容させた、ということができるだろう。[32]

曹植は、「辞賦小道」という一つの道を示したが、一方で魏晋においてはさらに辞賦に関する議論が展開する。例えば左思の「三都賦」は班固、張衡のものした所謂都邑賦を継承したものである。左思は「三都賦」の序文にてやはり辞賦に関する議論を行っている。さらに陸機は「文賦」にて創作理論とも言うべき議論を展開し、自身も辞賦作品を作っている。このように、辞賦に関する議論も辞賦作品も、魏晋以降さらに盛んになってゆく。[33] これらに対する考察については、今後の課題として、稿を改めて論ずることとしたい。

注

(1) 揚雄『法言』吾子篇

(2) 班固「両都賦序」（『文選』巻一）

(3) 曹植「与楊徳祖書」（『文選』巻四二）

(4) 魯迅「魏晋の風度および文章と薬および酒の関係」（竹内好編訳『魯迅評論集』岩波文庫一九八一年）

(5) 費振剛『全漢賦』（北京大学出版社一九九三年）および費振剛・

仇仲謙『全漢賦校注』（広東教育出版社二〇〇五年）は「皇太子生賦」を存目として録す。

（6）『漢書』枚皐伝

（7）『漢書』揚雄伝

（8）揚雄の模擬性については、弗和順「揚雄『法言』における摸倣と創造」『中国研究集刊』三〇（大阪大学中国学会二〇〇二年）に指摘がある。

（9）例えば、司馬相如の「子虚上林賦」の後に揚雄が「河東賦」や「甘泉賦」を作り、班固が「両都賦」を執筆した後に張衡が「両都賦」に擬して「二京賦」を、さらには左思が「二京賦」に擬して「三都賦」を執筆している。また、模擬することとその創作意識については、岡村繁「班固と張衡―その創作態度の異質性―」（『小尾郊一古希記念中国学論集』汲古書院一九八三年）に論考がある。

（10）『漢書』「揚雄伝」では、さらに「雄以爲賦者、將以風也。必推類而言、極麗靡之辭、閎侈鉅衍、競於使人不能加也、既乃歸之於正、然覽者已過矣。往時武帝好神仙、相如上大人賦、欲以風、帝反縹縹有陵雲之志。繇是言之、賦勸而不止、明矣。又頗似俳優淳于髡**髡**優孟之徒、非法度所存、賢人君子詩賦之正也。於是輟不復爲。（雄以爲へらく賦は、將に以て風するなり。必ず類を推して言ひ、麗靡の辭を極め、閎侈鉅衍にして、人をして加ふる能はざらしむるに競ひ、既に乃ち之を正に歸するものなれども、然ども覽る者已に過まてり。往時 武帝神仙を好み、相如大人の賦を上り、以て風せんと欲すれども、帝反て縹縹として陵雲の志有り。是に繇りて之を言へば、賦は勸めて止まざること、明らかなり。又頗る俳優淳于髡・優孟の徒に似、法度の存する所、賢人君子の詩賦の正に非ざるなり。是に於て輟めて復たと爲さず。）」と、司馬相如に対して厳しい批判を行っている。

（11）この他、司馬相如は「答盛覽書」（『西京雑記』巻二）にて辞賦論を述べている。しかし、司馬相如の言説であるということに関しては疑義が呈されていることから（例えば周勛初「《西京雑記》中的司馬相如賦論質疑」『魏晋南北朝文学論叢』江蘇古籍出版社一九九九年）、別に検討したい。

（12）『漢書』「藝文志」と『七略』との関係については、古勝隆一『目録学の誕生―劉向が生んだ書物文化―』京大人文研（臨川書店二〇一九年）の「第一章　劉向目録学のインパクト」を参照し、この立場をとることとした。

（13）『漢書』「藝文志」詩賦略

（14）拙稿「張衡「二京賦」小考」『國學院中國學會報』第五八輯（二〇一三年）に、漢賦を『歴代賦彙』の分類に照らして一覧にした表を載せているので参照されたい。

（15）班固「両都賦序」（『文選』巻一）

(16) 班固の「両都賦」については、前掲注14に挙げた拙稿にて概要を述べた。
(17) 王符『潛夫論』務本篇
(18) 『後漢書』蔡邕伝所収
(19) 福山泰男「張衡詩賦小考—東漢後期の文学情況をめぐって—」『山形大学紀要 人文科学』一四（二〇〇一年）。後に同『建安文学の研究』（汲古書院二〇一二年）の第一章に一部抜粋して「補説　張衡「論貢舉疏」辨誤」として収録。また、鴻都門学については、上谷浩一「後漢政治史における鴻都門学—霊帝期改革の再評価のために」『東洋史研究』（京都大学）六三巻二号において、蔡邕の批判を受け止めつつも霊帝の改革を再評価しようと試みている。
(20) 蔡邕「宜所施行七事」（『後漢書』蔡邕伝）
(21) 曹丕「典論論文」（『文選』巻五二）
(22) 文学史上におけるジャンルの発生と展開については、褚斌杰著・福井佳夫訳『中国の文章—ジャンルによる文学史』汲古選書三九（汲古書院二〇〇四年）に述べられている。
(23) 曹植「前録自序」（『藝文類聚』第五十五巻雜文部一集序）
(24) 曹植の辞賦観を述べたものについては、李宝均『曹氏父子和建安文学』（中国古典文学基本知識叢書）の「五、曹植 理想与現実的矛盾在散文和辞賦中的反映」（上海古籍出版一九七八年）、鍾優民『曹植新探』（黄色山書社一九八四年）の「八、曹植的辞賦」、踪凡『漢賦研究史論』（北京大学出版社二〇〇七年）の「第二章 魏晋南北朝：漢賦研究的発展与興盛」、何新文・蘇瑞隆・彭安湘『中国賦論史』（人民出版社二〇一二年）の「第二章 魏晋南北朝賦論的拓展」などがある。また、曹植の別集としては、『宋本曹子建文集』（『続古逸叢書』所収）等の版本の他、（清）丁晏『曹集銓評』（世界書局一九六二年）、そして制作順に作品を配列した趙幼文校注『曹植集校注』（人民文学出版社一九八四年）がある。なお、『曹植集校注』は二〇一六年に中華書局より修正を経て再版されている。
(25) 張可礼『三曹年譜』（斉魯書社一九八三年）
(26) 江竹虚撰／江宏整理『曹植年譜』（台湾商務印書館二〇一三年）
(27) 呉質「答東阿王書」（『文選』巻四二）および楊修「答臨淄侯牋」（『文選』巻四十）。
(28) 曹植「与呉季重書」（『文選』巻四二）
(29) 呉質「答東阿王書」（『文選』巻四二）
(30) この他、『三國志』「陳思王伝」の裴松之注に引く『典略』も、「典略曰、楊脩字德祖。太尉彪子也。（略）又是時臨菑侯植以才捷愛幸、來意投脩、數與脩書。（典略に曰はく、楊脩字は德祖。太尉彪の子なり。（略）又是の時臨菑侯植 才の捷なるを以て愛幸し、意を來たして脩に投じ、數しば脩に書を與ふ。）」と、よ

り詳細な記述を引用した後に、曹植が楊修に与えた手紙と楊修がそれに答えた手紙を載せている。

(31) これについては、廖国棟『魏晋詠物賦研究』(文史哲学出版社一九九〇年)が詠物賦について総体的な研究を行っている。また、近年では許結・易聞暁主編『中国賦学第三輯』(斉魯書社二〇一六年)の「三、歴代辞賦研究」、林登順・阮玉茹「二、魏晋鳥獣虫魚賦之情思意識述論」に考察がある。

(32) 漢魏六朝時代における辞賦の抒情化という点については、徐公持「詩的賦化与賦的詩化」『文学遺産』一九九二年第一期(一九九二年)、黄水雲『中国辞賦論叢』(文津出版社二〇一二年)の「肆、論六朝賦詩化之原因及表現」、また単著としては池万興『六朝抒情小賦概論』(人民文学出版社二〇一三年)、同『《史記》与小賦論叢』(上海古籍出版社二〇一五年)等に論考がある。

(33) 例えば、西晋に摯虞「文章流別論」などの文学論を述べた著作が現れることが挙げられるだろう。また、漢魏六朝時代の文学論の展開については、最近では釜谷武志「独創と模倣—漢魏六朝の文学論を中心に—」『日本中国学会報』第七一集(二〇一九年)にて論じられている。

〔キーワード〕揚雄、詩人の賦と辞人の賦、班固、曹植、辞賦小道